

峰からの声

三浦 福助

2012/03/06

先年、沼津市にある歴史民俗博物館に行った時、面白いものを見かけました。太さ10cm、長さ5mほどの孟宗竹で出来たもので、節は抜いてあり、その先の方は細割して、70~80cm、直径50cmくらいの円錐形にしてあり、その部分を和紙で包むように貼り付け、漏斗状にしてあります。(図-1、2)



図-1 ローフー 先端部



図-2 ローフー 手元部 脇にほら貝もあります

これを見て、アッ!!!と驚きました。50年ほど前、学生だった頃に読んだ大島正満氏の「脊椎動物大系 魚」という本にこの物の写真があったことを思い出したのです。プリ

の漁法の紹介の項にこれを使っている写真が掲載されていたのです。

そうなのです。これでもある漁業には必要欠くべからざる物なのです。その写真を探し出したのが図-3です。なにやら、海辺の山の上に数人の人がおり、一人がこのものを口に当てています。また、その人の左右には菅笠が置いてあります。これは沼津市の内浦湾で行われていたマグロ、カツオを対象とする建切網(内浦では大網)で、魚群の来遊を知らせるための大きなメガフォンでローファーという物なのです。



図-3 ローファーの使用 大島正満「魚」より

大網は、潮に乗って内浦湾に回遊してきた魚群を海岸近くに追い込み、網で建ち切り追い込んで漁獲する趣向の漁具で定置網と追い込み網を組み合わせたようなものです。

湾内にはいくつかの漁場(網度と呼びました)がありますが、代表的なものとしては長浜地区があります。長浜には5つの網度があり、それにあわせて5つの網組がありました。魚群を発見したり、操業を指揮するために展望の良い海に臨む山の上に櫓や小屋を建てて魚見所を作り、ミネと呼びました。ミネにはミネドンが常駐し、湾全体を見張り、漁の総指揮を執るオオミネと操業の際に細かい指示を出すコミネがありました。長浜のオオミネは宮戸にある山の中腹にあり、そこに小屋を作り待機していました。海の色や光、波の立ち具合、鳥の動きなどから魚群を見付けこのローファーで浜の小屋に待機している漁師たちに知らせ、操業を始めさせたのです。漁が始まるとローファーや菅笠を使って魚の動き、船や網の操作を指揮したのです。ローファーで叫ぶ役をする人は「声師」と云い、特別大きな、しかも透る声の持ち主を選んだのだそうです。

追い込んだ魚群は浜の近くの網で取り上げるのですが、大型のマグロなどは海に入った漁師がシビカギという丈夫な手鉤で引っ掛け引揚げ、鮮度を保つためにすぐにカケヤで叩いたそうです。手鉤の掛けどころが悪いと漁師が海に引き込まれることがあり、こ

うした騒ぎが終わる頃には付近は血の海になったそうです。

これらの魚は、三津、沼津、江戸、駿府、甲府などの魚商人が買い付け、馬や船を利用して各地に輸送されたものでした。売り上げはかなりのものであり、代官からの課税も高額なものであったそうです。魚群の回遊と地形に恵まれ、戦国、江戸時代初期から大正初期まで盛んに行われていました。長浜などは海に迫り、平地が狭い地形で、田畑が少ないところですが、江戸時代には幕府直轄の天領であり、その背景には建切網による莫大な税収があった、とも云われています。

ところで、近くに山が無い場合はどうしたのでしょうか？

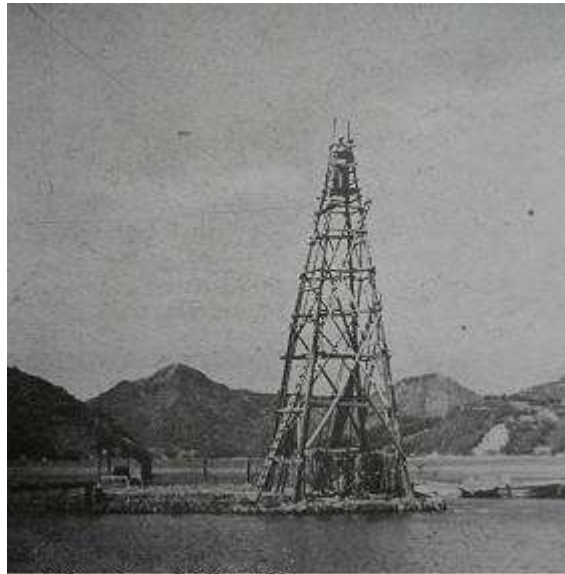


図-4 木造の櫓

なんと、筏を作りその上に櫓を組んでミネを作ったのです。この上にミネドンがいたのでしょうが、声師もいてローフーを使っていたかどうかは判りません。いずれにしても、この漁業にはミネとローフーが必要不可欠であったのです。

まことに珍しいもので、明治時代にお雇い外国人として来た(1876-1911)、バジル・ホール・チェンバレン氏は、その著書「日本事物誌」で日本のことを色々と紹介しています。その(Fishing)の項では、かけ網、築、鵜飼、投網などと並べ次のような例を記述しています。

日本の田舎では、今でも魚を捕る方法にはいろいろ奇妙なものがある。

—中略— 伊豆の海岸に点在する魚の見張り台も、興味深い。これら望楼は、海を見下ろす高い断崖の上に立っていて、そこには経験の深い漁師が見張りをしている。そして鮪の群れが入ってくるたびに、下にいる漁師たちに法螺貝を吹いて知らせ、村の大きな魚網を引かせる。—以下略

ここではローフーのことは触れていませんが、ローフーを使わない漁場もあったのです。伊豆の近く相模湾の例ですが、小田原市二ノ宮地区では往時、地引網が行われており、ソーダカツオなど回遊魚を狙って操業していました。漁期近くなると浜で見張っており、魚群が見えるとほら貝を吹いて村中に知らせ、人を集め網を入れたそうです。

人を集めるだけなら、これで良いわけで後は手馴れた地引網を操業するだけです。図-2をよく見ると、ローフーのそばにほら貝が展示してありますが、内浦湾でもほら貝を併用していたのでしょうか。しかし、建切網では魚群の行動に合わせて網を展開する必要がありますので、漁労長からローフーよる細かい指示があったものと思います。

日本全国にはかなりの数の魚見台、魚見塚などがあるようです。それぞれの漁法、地形により活用法も違っている事でしょう。しかし、ローフーのような拡声器を使って漁労の指揮をするというのは大変珍しいのではないかと、思います。

伊豆の静かな漁村で、昔の事ですから車などの騒音も無くわずかに鶏犬の声のみが聞こえるような日に、いきなり峰のほうから叫び声が聞こえ、魚群の発見を知るのです。人々は浜に走り、その声に従って網を入れて操業が進んだ事でしょう。そして、その夜は大漁祝になったのでは無いでしょうか。ローフーから、どのような声で、どのような言葉で聞こえたものか、聞いてみたいと思いますが、すでに適わぬ夢となってしまいました。

----- END -----